

地域密着型ヨットレースの可能性 神奈川県葉山町「くるるマッチ」の例

地方自治体や地域住民との交流のなかでヨットレースを行うことは、セーリングを普及させる大切な手法のひとつだが、一つの例として、神奈川県葉山町のイベントとマッチレースを融合させたケースを紹介する。

「くるるマッチ」と銘打たれたこのレースイベント、地元には根づかせようとの努力がつついている。

葉山を舞台とするマッチレース

マッチレースはセーリング競技の中でも参加チームが限られ、レース主催者が同一規格の艇を用意し参加者を招待する形で行なわれるため、まずは同型艇の準備が欠かせません。JYMA（日本ヨットマッチレース協会）はNPO法人日本セーリング協会が所有する6艇を拝借し、葉山マリーナヨットクラブなどの協力を得て活動しています。

レース運営を行なうだけではなく、セーリング技術の向上、セーラーの育成にも力を注ぎ、さらにセーリング普及のためにマッチレース（ヨットレース）を多くの人に知ってもらい、そしてセーラーが自身が誇りを持つてレースをし、それを語ることができるよう活動に取り組んでいます。

JYMAは年間を通じて会議を繰り返して、スポンサー獲得やレース運営の準備、情報収集に取り組み、実際のレースではイベントを華やかにして注目を集める方法を考え、外部に対しての告知を地元ラジオ、テレビ、フリーペーパー、ホームページなどで行なっています。

協力関係者の方々を招いてのパーティ、エキシビジョンレースの実施なども行っています。しかし、レーススケジュールを優先しながら様々なイベントを行なうのは難しく、天候やイベント進行状況などを配慮しながら素早い判断と決断を行い、回数をこなすたびに経験が積み重ねられてきています。

諸外国のマッチレースイベントや北米、ヨーロッパのフリーレースで選手が体験した運営やその場の雰囲気などを、日本の文化

に融合する形でどう反映していけばいいのかを毎年行なわれている全日本選手権（毎年11月第3週、葉山マリーナ）で試行錯誤を繰り返しながらテストしています。

しかし、これらの努力がすべて報われているわけでもありません。スポンサーが簡単に見つかるわけもなく、協力者が急に増えるものでもありません。けれど、回数を重ねるたびに選手たちのレベルは上がり、新しい参加選手が増え始めてきているのは嬉しい事実です。

ニュースや映像の配信、プロモーションDVD製作など、現場の活動の裏で地道に行なってきた活動が少しずつですが浸透し、マッチレース競技の魅力がセーラーに伝わり始めたことも実感しています。

一方、「いいレースをすれば選手は集る。結局セーラーはセーリングそのものを楽しみたいのだ」と考え、「最高の風の中、最強のライバルを倒すことが最高の喜びだ」と信じ、競技としてのマッチレースを行っていき、それが多くの人々の目に触れ、選手と観客が一体になれたらどれほど楽しいだろう、仲間や家族の応援が届く場所まできたら素敵だろう！とも考えます。マークを回る瞬間、相手をリードをしたときに湧き上がる歓声を想像するだけで興奮を覚えます。

そんな光景を現実にするためにJYMAの活動は続いています。

地域とのコラボレーション 理想が現実へ

あるとき、神奈川県葉山町の活動団体の一つである「葉山港みなとまちづくり協議会」

から活動に参画しないかというお話をいただきました。公共マリーナである葉山新港を、町づくりの視点から活用するための協議会です。そこで、協議会が主催するお祭りの中でヨットレースが行なえないかという提案をいただきました。その結果、開催までには多くの課題がありました。2008年に「第1回くるるマッチ」が開催され、今年で第3回を迎えました。

「くるる」とは、「歩く、観る、乗る」の語尾3字を連ねた造語ですが、葉山港の施設を活用し、葉山港を拠点とした地域の個性を生かした町づくりをめざすお祭りイベントです。今年には海のイベントの充実が図られ、マッチレース以外にもウインドサーフィン、アウトリガーカーヌーのイベントや子どもたちの体験セーリングなども実施されました。

陸上イベントも充実しており、海上保安部の音楽隊演奏、葉山御前太鼓演奏、フラダンス、猿回し、そしてアーティストによるライブが花をそえました。

会場内には地元商店街や移動飲食店などが出展し、1日を通じてマリーナで過ごせる空間を作り出していました。町づくり協議会のメンバーの努力もここに結集されており、今年はおよそ2800人の来場があったといえます。

これからの海系イベント

防波堤に食事を持って春の日差しを浴びながら海を眺める。そこにヨットが浮かんでいる。そんな場面に遭遇したらきっと「いい景色、海っていいなあ」となるはず。これがJYMAが「くるる」とジョインした一番

の理由です。知らない人たちにヨットレースを説明し、海に見に来てもらうことは至難の業。偶然遊びに来たらヨットがそこにあったというのが理想的。この思いは、自分の家族を呼ぶのに苦労したセーラーなら誰でも持っているはず。

ヨットレースを見るだけのイベントではなかなか呼びにくくても、お祭りの中でヨットレースがあるよ！と誘えば遊びに来やすいはず。それが定例になればレースをする人、見る人が一緒に楽しめるイベントができる、という発想でした。

書いてしまえば非常にシンプルな話です。しかし、定着するまでには時間がかかるし、イベント自体が永久に継続するかはわかりません。地域とのかかわりの中で変化しながら柔軟に対応していく姿勢が必要でしょう。

またセーリング競技に留まらず、同じフィールドで遊ぶ仲間（他のマリンスポーツ関係）と協力して地元漁業関係、町役場、地元自治体との横のつながりも同時に考える必要性もこのイベントを通じて感じました。

今後は定期的に行なわれるJYMA公式戦の一つとして定着させるとともに、全日本選手権を超えるグレードのイベントとして発展させる計画です。アジア・パシフィックマッチレースとしても行なった2010年大会には韓国、インド、ロシアから海外招待チームも参加してくれました。今後のヨットイベントの発展にはレースレベル（競技者）の向上とイベントレベル（スポンサー獲得、観客導入、映像発信、メディア対応）の向上のどちらも欠かすことができないと思います。

単にヨットレースだけを行うのだけではなく、レースを含むイベント全体を企画することは簡単だとは言えませんが、理想をなくしたら前には進めません。

この記事を読み自分の水域で新しい試みを考えている方がいればぜひ前に進んでみてください。アップウインドかもしれないですけど新しい風は吹きはじめます。（伊藝徳雄／日本ヨットマッチレース協会理事）





マッチレースに参加した選手たちも陸上イベントに登場し、選手紹介を受けた（写真左）。このようにヨットレースとイベントの融合を企画するのも地域に受け入れられる方法のひとつ

おサルさんやフラダンサーまで登場するのが葉山くるる。この他にもライブ演奏会、葉山御前演奏会なども行われた（上記4点の写真提供／葉山港みなとまちづくり協議会）



くるるマッチは岸壁から観戦しやすくコースがレアウトされているので、お祭りイベントにも大いに貢献（photo by Junichi Hirai）